
どんぐり壊れてごまをする。

九木れかにふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どんぐり壊れてごまをする。

【Nコード】

N9288K

【作者名】

九木れかにふ

【あらすじ】

ころがる少女、おどけるメガネ、伝説の靴下を探すヘンタイ。妄想と非現実が交差はしないけど合体して、存在しえない存在を、彼らのためだけに作り出す。

ヘンタイはどこだ。皆ヘンタイだ。

神はどこだ。神は俺だ。物語を操るのは一粒の胡麻なのか。

（前書き）

ほんつとくに頭の悪い小説ですので心の広い方のみ閲覧してください
されば光栄です（笑）

少女が転がって、そして眼鏡の男は飛び退きかわした。物語はそこから始まって、けれどもやはり始まらない。そもそもこれは、物語ではないのかも知れない。

そして少女は池に嵌り、一度動き出した世界は、人の意思では止まらなかった。

以下、狂宴。

*

どんぐりころころどんぐりこ。幼少の頃に誰もが耳にしたであろう童謡は、果たして異常なまでの状況下で、異常なまでに軽快に歌われていた。

お池に嵌ってさあ大変。自身が池に落ちてぐしょぐしょに濡れている少女は、まるで他人事とも言わんばかりに自らの現状を口ずさむ。

これは厄介なものに出くわした、と、眼鏡の男は嘆息した。歌う少女も大概変だが、問題はその傍らに顔を出している存在だった。これは現実で、童謡の世界では無いはずである。にも関わらず、少女に呼応するかのように、そこにはあれがいた。

泥鰌が出てきて今日は。少女が歌い上げるとともに、一際強くそいつが跳ねて。当然のように、

「坊っちゃん一緒に遊びましょう。……あれ？ こりゃあ嬢ちゃんじゃねえか」

口をきいた。状況に突っ込みも入れた。流石に男は耐えかねて、喋る泥鰌を掴み上げて、ようやく少女に話しかけた。

「何しやがる、てやんでいっ！」

お前黙れ口を開くな。男は手元の革袋に叫ぶ泥鰌を突っ込んで、ま

た彼女に向き合う。

「こんにちは、お嬢さん」

「こんにちは、メガネ君」

メガネ君が自分の事だと認識するのに、男は数秒を要した。

童話と寓話の違いはなんだっけ。メガネ君と命名された男は、何の気なしに考える。目の前に早急に対応しなければならぬ事象があるのだが、それよりも今は思考の方が大切だ。そんなわけがない。つまり、現実逃避。

「お嬢さんは、ここで何をしているのかな？」

コホン、と咳払いして、メガネ君が口を開く。逃避もいい加減にしておかなくては、事は前に進まないだろう。袋の中で暴れる泥鰌に顔をしかめながらも、可能な限りの優しさをこめて言の葉を紡ぐ。

「転がってるの」

衝動に負けて頭を抱えなくなった。なので抱えた。ついでに蹲った。直感で思う。この娘はいわゆる電波だ。

「今は止まってるじゃないか」

「そうね。じゃ、転がっていたの」

「ああ、でも、聞きたいのはそういうことじゃないんだけどな」

「そうなの？　じゃあ、何？」

「どうしてここで転がっていたの？」

「どんぐりだからよ」

答えになっていない答えを言って、どんぐり少女はメガネ君の方に両手を伸ばした。訝しむ彼に、少女は言う。

「泥鰌さん、放してあげて」

「こいつ、泥鰌じゃないよ」

「知ってるよ。それは泥鰌さん」

どうにも話が噛み合わない。メガネ君はしばし逡巡していたが、やがて諦めたように息を吐き、皮袋をひっくり返した。中で暴れていた妄想の産物は、それでようやく池に戻る。

「ふう、やっと出れたぜ」

だから喋るなと言うのに。解放したばかりのそいつをもう一度袋にぶちこもつかと考えたメガネ君だったが、ふと疑問を覚えて、少女と向き合う。

「泥鰌さんを解放してどうするんだい？」

「それは勿論」

愚問、とばかりに少女は笑って、

「一緒に遊ぶの！」

告げた。

*

行き倒れている男を見つけて、山野はため息をついた。彼の中の良心が、ここぞとばかりに鬨ぎ立てる。大事な場面では出てこない癖に、と、山野は毒づいた。

結局、助けるわけなのだが。見て見ぬふりを出来るほどに、山野は完成した人格を持っていなかった。無理矢理担ぎ起こして古い木造建築の自宅まで連れて行き、水を飲ませる。急に水分を摂ったためか男は咳き込み、それで眼を覚ました。

「う……。……は、」

腹減ったとか言うのだろうか、と、山野は内心で考える。それはベタすぎるな、と自己完結した。

「腹減った……」

「ああまあそうだろうなっ！！」

吐き捨て、山野は台所へ向かう。カ。リ。ー。メ。イト。が。有。っ。た。は。ず。と、およそ行き倒れには相応しくない食材を思い浮かべた。

「おい山野のおっさん」

「二度と出てくるなと言ったはずだが」

空間から滲み出るようにして現れた泥鰌は、切り捨てて先を急いだ。「そう言うなよ。ってかな、行き倒れにはもつと腹にたまるもん食

わせてやれよ。そうさなあ、この家にあるもんだと、カップラーメンこつてりトンコツ味」

「一理あるな有難う今すぐ消えろ」

口早に礼を言つて目標変更。角を曲がるついでに泥鰌の腹に裏拳を打ちこむ。「ひぐまつ」とうめき声がして、妄想は元の世界へと消え去った。次来る時はツキノワだろうか。何の話だ。常時沸かし続けている文明の利器ザ・ポットのお湯を内線まで注いで蓋を閉じ、縁側に放置してある男の元へと移動する。持って行ったカップと割り箸を渡すと、男は三分待たずに一気にそれを食らい尽くした。三分後には、のた打ち回る男の姿を庭に視認できた。舌と口周りを火傷したらしい。当然だ。

たつぷり五分ほど転がっていた男に水のペットボトルを投げつけて黙らせ、山野はようやく事情聴取に入った。

「それで、君は一体誰なんだ。なんで行き倒れた」

「ほへは五月川 誉。へんへふほふひはほはひひひはんはは、はへはふひへひつはんはひはへへひはひんは」

「悪い。名前しか聞き取れなかった。もう一度言ってくれ。次は張つ倒すぞ、釘バットで」

「俺は五月川 誉。伝説の靴下を探しに来たんだが、金が尽きて三日間何も食べていないんだ」

「伝説の靴下って何だ？」

「素晴らしい臭いが染み付いた靴下だそうだ。古い文献で読んだ。折角の縁だ、助けてくれた礼も兼ねて、手に入ったらアンタにもかがせてやるよ」

いらん、と反射的に答えそうだった山野は一瞬堪えて、考える。

山野の職業は童話作家だった。見た目からは想像もできないがすでに三十六歳で、しかし、最近は本を出しても中々売れなくなっている。スランプと言つて間違い無い状態なのだ。

「……面白そうだな。私も着いて行つていいか？」

「お、協力してくれんのかい？ いいぜ！」

かくして、二人の男は五月川の持っていた地図を頼りに山野宅の裏山へと歩を進めるのだった。展開が急な件については、彼らの知るところではない。

裏山、と言っても、その高さは成人男性ならば一時間そこらで山頂まで登れる程度のものである。しかも観光用に道も整備されているので、五月川の探す伝説の靴下なるものがあるのならば簡単に分かってしまうはずなのだが。

「で、どこにあるんだ靴下」

「んー？ 多分こつち」

盛大に迷つての現状だった。道なき道を、背の低い草木をなぎ倒して進んでいる。かれこれ、散策開始からすでに三時間は過ぎていた。「本当にこの山にあるのか？ それは」

「あるさ。きつともうすぐ見つかる」

一歩進むと、何かを踏みつぶした音が聞こえた。山野は何となく視線を落とす。割れて中身の崩れたどんぐりが、彼の視界に映った。

*

どんぐりころころ喜んで。

どんぐり少女は先程から無邪気な笑顔を手条件に無理まいて泥鰌と戯れている。これ以上突っ込む気にもなれず、メガネ君は黙ってその様子を眺めていた。

しばらく一緒に遊んだが。

ぴたりと、少女は笑顔をひっこめた。何か、と首をひねり、童謡の続きを思い出して焦る。

「おい、お嬢さん——」

「ふえ」

あちゃー、と、泥鰌が鰭を駆使して顔を押さえている。無視した。やっぱりお山が恋しいと。

ここで、メガネ君はとある可能性について考えた。どんぐりは、山を恋しく思うのだ。この場合の山とは、つまり家のことであり、彼女は歌をなぞって家が恋しいと泣きだすことだろう。そうなると思えば。

メガネ君——山野が自らの日常を取り戻すには、その方法が一番であるかのように思えた。

*

泣いては泥鰌を困らせた。

声を張り上げて泣き叫ぶ少女に、思わず山野は耳を塞いだ。が、ここで怯んでいる場合ではない。それが、五月川とかわした約束だった。

*

結局、半日をつぶして、靴下は見つからなかった。二人は一度山野家に戻り、成り行きで泊まることになった五月川に超簡易な夕食を振る舞いつつ、話題はやはり達成できなかった目的の事になった。

「五月川、お前、明日も行く気か」

「勿論だ。すまないねえ、泊めてもらうことになってしまつて」

「ああ、いいんだ。もともと女っ気も無いどころか職業柄人と関わることも少ないんだ」

「仕事か。何やってんだ？」

「童話作家」

「……へえ。あのさ、山野」

「なんだ」

「ひとつ、約束してほしいんだ」

急に真剣な表情になった五月川につられ、山野も少し居住まいを正す。

五月川はほうれん草のお浸しに混ざっている胡麻を一粒一粒取り除きながら、

「いつか、アンタがあゝの山で何かを見つけようなことがあれば、気に掛けてやってほしいんだ。出来れば、それを在るべき場所に戻してやって欲しい」

「在るべき場所か。わかった」

「ありがとう」

その言葉が、山野が聞いた彼の最後の言葉だった。

翌朝目覚めると、そこに五月川の姿は無かった。宿泊費を千円払うと言っていたくせに、玄関先に置いてあるのは五百円玉一枚だった。

*

泣いて困るのは泥鰌で、確かに、泥鰌だけなのだ。山野は、当然泥鰌ではない。故に、困らない。

為すべきことが分かっていれば、やるべきことは遂行だけだ。

「お嬢さん、これを食べるといい」

山野は、泣き叫ぶ少女の前に右手を差し出した。手のひらには、三粒の胡麻。

「ひつく、うつ、ご、ま？」

「そうだ」

少女は胡麻を手に取り、ためらい無く口に運んだ。数回の咀嚼の後、咲くのは。

「待て！」

往生際の悪い泥鰌は話の齟齬を恐れて叫ぶ。少女を、山野を、食らおうとその体躯を十数倍に膨れ上がらせる。

対処法も、簡単なものだった。

「なるほど、確かに臭うな。いい匂いでは、決していないみたいだが」池に嵌っていたどんぐり色の靴下を、山野は拾い上げた。無造作に、それを泥鰌に投げつける。

耳をつんざくような叫び声をあげて、泥鰯はその姿を消した。自分の弱さで生み出してしまった泥鰯に、山野は謝辞を述べる。
「あばよ」

山野が呟くのとほぼ同時に、少女は花の様な笑みを浮かべた。

＊

その後の話。

どんぐりはその身を山野家において。

スランプの作家は娘を取り戻し。

靴下を探し求めた変態はその業を終えた。

泥鰯は、もう必要ない。

（後書き）

山野とメガネ君は本文の通り同一人物で、早くに亡くなった妻との間に一人娘を持っていたが娘は山野の描いた創作に取り込まれて心を閉ざす。

娘は、ここまで書けば分かると思いますが、どんぐりの少女。

泥鰌は、山野の後悔と挫折が産んだ不要の産物。だから「泥」鰌。

こいつは山野の創作を完遂するために少女や山野の思考を操ろうとします。

そして五月川の存在。あいつはヘンタイさんで、それはいいとして創作世界を知る唯一の登場人物です。世界がネガティブに進んでいるのを見かねて、まあつまりあらずじの「神」的存在は彼です。靴下については、山野が描いた童話のキーアイテム。もっとほんわかと使われてます。「優しい香りのするくつした」って感じで。それでも嫌なのは俺だけか？

ごまの存在。めちゃくちや遠回しなこじつけの比喻ですが、ごま↓すりごま↓ごますり↓弱い精神の象徴みたいな使い方です。だからそもそも弱い心の無い五月川は狙って食わないし、逆に弱っていた少女には率先して食わせます。

文章の話。最初、「どんぐりころころどんぐりこ」と書いていますが、正しくは「どんぐりころころどんぶりこ」であり、これは『間違った世界』ということをやっとだけ強調したくてのようです。その直前に「物語ではないのかもしれない」とありますが、その補足のそくな役割で。

でわ、ここまで読んでくださった勇者のような方、ありがとうございます。よろしければ感想評価等していただけると光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9288k/>

どんぐり壊れてごまをする。

2010年10月21日22時06分発行